

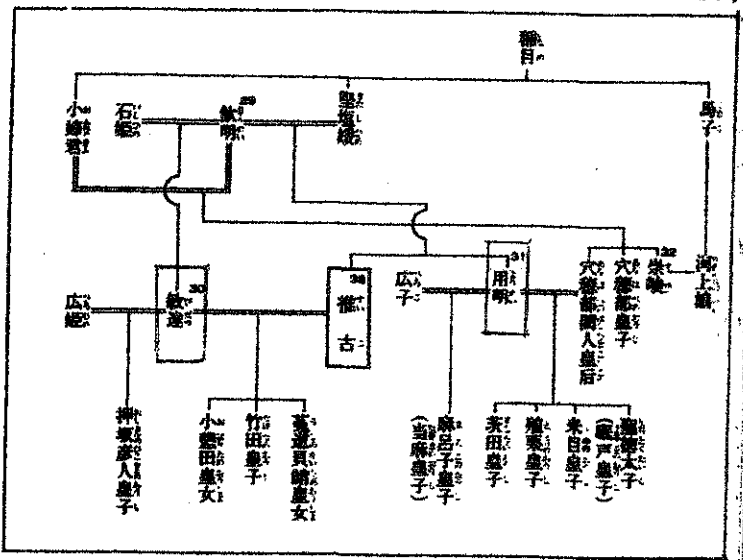


兄妹と言っても母が違う場合で、父母を同じくする兄弟姉妹の結婚は劣性遺伝の確率が高く、この時代でも許されなかった  
 当時、近親結婚が多いのは、男が女の家に通う招婿婚(ショウセイコン)で、子は母の実家で生まれ育つので母が違うと兄妹という感覚は起こらない  
 皇女・女王は天皇家の地位が高いだけに他の氏族の男性と簡単に縁組ができない。「后(キサキ)」は他氏族の者でも良いが、「皇后」は天皇の特殊性から皇族が望ましい。天皇家では近親結婚の濃度の濃さが天皇権力の強大さのパロメータといえる

「天皇制」

天皇制は血の原理から成立っているから、皇太子は必ず天皇の子でなくてはならない  
 しかもその時も母方の血が問題であり、出来るだけ多くの天皇家の血が必要である  
 欽明天皇には皇子が16人いたが、宣化天皇の娘3人の産んだ皇子が、より資格を有している  
 宣化天皇の娘、石姫には敏達天皇がいる  
 しかし、蘇我稲目は娘の皇子を皇太子にと願望したのか、敏達天皇は欽明29年まで皇太子になれなかった

系譜2(日本書紀 敏達天皇と用明天皇)系譜



30代 敏達天皇

欽明天皇には皇后と妃、合わせて6名、皇子が16名、皇女が9名いた  
 皇后石姫は宣化天皇の娘で継体天皇の血を引き、且つ仁徳天皇の血を引く当時血統的に高貴な女性であったので欽明天皇はその子敏達天皇を後継者に指定していた  
 敏達天皇の皇后広姫が死去すると、豊御食炊屋(トヨミケカンキヤ)姫(33代推古天皇)を立て皇后とした  
 敏達天皇は物部守屋を大連に、蘇我馬子(スヘノマコ)を大臣としたが、三輪逆(サカウ)を相談相手として政治を行った  
 敏達天皇は父の時代に政治を支配していた蘇我氏に対する反感があり、仏法を信じられなくて、文章や史学を愛された  
 仏教移入に伴って入ってきた天然痘が流行し、多くの民が、馬子も罹った  
 馬子は病気治療には、仏の加護が必要と奏上、敏達天皇は、馬子に私的信仰を許可した  
 仏教に好意を持たない敏達天皇は「仏教の弊害は明白、仏法をやめよ」と言われ仏教弾圧が始まった。仏教にとっては厳しい時代であったが、蘇我氏や蘇我氏の血を引く皇子や皇女は仏教崇拝を辞めた訳ではない  
 敏達14(AD585)年、仏教嫌いの敏達天皇はおそらく天然痘で死去した  
 当時「天皇は成年男子」との観念が常識であった  
 前皇后の子押坂彦人皇子は15・6歳前後、後皇后推古の子竹田皇子は12・3歳、尾張皇子は5・6歳前後であった  
 押坂彦人皇子をはじめ皇子等はまだ成年に達していない。天皇の資格としては失格である  
 敏達天皇の死後、皇位継承者の一人小姉君の子、泥部穴穂部皇子は物部守屋と謀り、三輪逆の暗殺を計画した。しかし、穴穂部皇子は途中で断念した。物部守屋が単独で三輪逆の殺害を実施した。穴穂部皇子の天皇への自己推薦は失敗した

31代 用明天皇

馬子は炊屋姫皇后と相談して、蘇我系の最年長者である用明天皇を次代の天皇とし、押坂彦人大兄皇子を皇太子として推薦した  
 群臣の決議を得て、AD586年用明天皇が即位した  
 しかし、用明2(AD587)年即位したばかりの用明天皇は病の床についた。天然痘であった



ある男が猪を献上した。崇峻天皇は猪を見て「いつかこの猪の首を斬るように、わしの嫌っている男の首を斬りたい」と呟いた  
この一言が馬子に伝わり、崇峻天皇を廃する機会をうかがっていた馬子は、炊屋姫との暗黙の諒解があったのであろう、天皇の暗殺を決意した  
馬子は東漢(ヤマトノアヤ)駒に崇峻天皇の暗殺を依頼した

### 33代 推古天皇

崇峻天皇の亡き後、次の有力候補は用明天皇と穴穂部間人皇后の子聖徳太子と、敏達天皇と炊屋姫皇后の子の竹田皇子である

この時、崇峻5年の時点では聖徳太子は19歳、竹田皇子は聖徳太子より若い

穴穂部間人皇后も炊屋姫皇后もともに欽明天皇の娘。穴穂部間人皇后は皇后の在位が僅か2年に対し炊屋姫皇后は在位14年

馬子は伯父と姪の間柄を巧に利用して、炊屋姫と組んで皇位継承その他皇室内部の問題を解決してきた

穴穂部の殺害、守屋の謀殺、崇峻の即位と炊屋姫の計らいであり、崇峻の暗殺も相談を受けていたのであろう

日本書紀は炊屋姫皇后を「容姿端正で立居振る舞いに誤がない」と記している

推古天皇は積極的に態度を決する政治家ではなく、賢明で自分を良く知ってる女性であった

崇峻5(AD592)年、馬子は敏達天皇の皇后である炊屋姫皇后に皇位を継がせた。同時に、用明帝一族の皇子等を満足させるためにも、以前から注目していた聖徳太子を皇太子の地位に置き、摂政という形で天皇の職務を任せ、二侯を掛けた提案をし、承認された

推古天皇としては竹田皇子に皇位継承したかったであろう

天皇の信望も厚く50歳前後で多年の経験を積み、政治感覚に円熟・老齢を加えた蘇我馬子と、天皇見習として天皇を補佐する聖徳太子、そして推古天皇を頂点とするトコイ方式であった

### 摂政 聖徳太子

聖徳太子は敏達3(AD574)年に生まれた。聖徳太子の銘は太子の英明・仁慈を讃えて付けられた諡名(オクリナ)で厩戸皇子・厩戸豊聰耳(トホトミ)皇子と

呼ばれた。母の穴穂部間人皇女が宮中をみまわっていたとき厩の前で太子を出産したので厩戸皇子と

しかし私はむしろ逆で厩戸という珍しい名前を説明する為の作り話では？また豊聰耳という名から一度に10人の訴えを聞いて判断を誤らなかった話が作られたと思う

父親の用明天皇の母は堅塩媛。母親の穴穂部間人皇女の母は小姉君。堅塩媛・小姉君ともに蘇我稲目を父とする姉妹で、夫は欽明天皇

つまり父方、母方ともに祖父は欽明天皇、曾祖父は蘇我稲目

蘇我氏は臣姓を持つ奈良盆地に本拠を持つ豪族で、文官の家柄で帰化人を統制し、三蔵の出納を司った

日本の朝廷は文字の効用を認め、蘇我氏は東西の漢氏、秦氏等帰化人を管理し、国家財政を握る大蔵官僚として政府中枢部へ進出した

蘇我氏は帰化人と強く結びつき、海外の先進国がこぞって崇拝している仏教の採用にいち早く踏み切った

蘇我氏は奈良盆地の豪族として皇室との縁組が出来るのに対し、物部氏は自分の権力を神聖化する宗教的権威を持つ連姓で、天孫の後裔で王権

に対する従属度が強く、部民を率いて皇室に仕えたが皇室との血縁的關係は薄い

蘇我氏が物部氏と共に最高の権力の地位にのぼり、次代の独裁的権力の基礎を固めたのは、この蘇我稲目の娘2人、堅塩媛と小姉君を欽明天皇の

后とした時代であった

崇仏派の馬子は蘇我氏の血を引く、仏教崇拝の心の厚い将来の天皇を求めていた

聖徳太子は天皇家と蘇我氏の両方の血を引くだけでなく、堅塩媛系と小姉君の両方の血統を受け、稲目により人為的に作り上げられた人間に

思われる

### 摂政聖徳太子と高句麗の僧慧慈

崇峻5(AD592)年推古天皇が即位し、19歳の聖徳太子を皇太子とし、国政を全てまかせる摂政にした

推古9(AD601)年までは太子の政治家としての準備期間であった

太子は天皇の見習いとして天皇を補佐するに当り、儒教を覚(カク)博士に学び、慧慈と慧聡を師として、仏教、及び隋・新羅・高句麗・任那等の国際情勢を学んだ

当時の高句麗は仏教の水準ははなはだ高度で僧慧慈は高句麗第一級の学者であった。太子の仏教は慧慈に負うところが多く、2経の講讀も3経義疏(サンキョウキショ)も慧慈がいなければ成立しなかつたろう

伊予国風土記に推古4(AD596)年聖徳太子が慧慈と葛城臣と共に伊予道後温泉を訪問し、そこに碑文を建てたとの報告がある  
その文章は六朝時代に用いられた4字・6字からなる句を連ね、それを必ず対句として用いる四六駢儷体(シロクベンレイタイ)で書かれている  
この文章を解釈するには儒教・道教・仏教の古典に通じていなければならないと言う

私には読む事も出来ない漢字の羅列に見えるこの文章を、23~24歳の太子が作成されたかと思うと、太子の中国、朝鮮3国の国際情報の認識、中国語等の教養の高さは、私のような凡人の到底想像出来る物ではない

筑紫で新羅征伐軍の將軍葛城臣と高句麗の外交官慧慈を伴って、日本の海外への窓口、瀬戸内海を訪れ視察した。その事は新羅・百済は日本・高句麗に対し外交的脅威、不安を感じたであろう

推古6(AD598)年新羅は朝鮮には居ないカササギ・孔雀と珍しい鳥を送ってきた

## 日本書紀の記載のない遣隋使

開皇(カイコウ)20年は日本の推古8年(AD600)年、この年は積極的な外交に日本が踏み切った年である

隋書には開皇20(AD600)年と大業3(AD607)年の2回日本の使節の来朝を記載している

しかし、日本書紀には大業3年、推古15年に小野妹子を長とする遣隋使の記載があるが、開皇20年の記載がない

隋書が倭王の使者の来朝の記事を偽作するはずはない。そうしても何の利益もない

偽の使者が行ったとも考えられない。もし開皇20年に行った使者が偽者であるなら、大業3年の使者小野妹子が暴いているはずだ

隋書による開皇20年の倭王の使者派遣は事実であると思う。その使者は何の目的で行ったのか?

この時高句麗は隋との緊張関係が続いており、高句麗は120年ぶりに来朝する日本の使者を伴って行くことで、文帝の怒りを和らげたいと考えたのであろう

太子の師として慧慈が来日して既に5年、高句麗の外交官でもある慧慈がこの遣隋使の派遣の裏にいて遣隋使の派遣を進めたのであろう

推古天皇・聖徳太子・蘇我馬子は日本の使者に世界第一の文明国隋がどんな国か、国情視察に大きな意味があると思い、高句麗の勧めに従い、軽い気持ちで使者を派遣したと思う

隋の文帝楊堅に「お前の国のありさまはどうか」と訊かれた。中国に於いては帝王は絶対に男性で女性の王を持つ国はよほどの未開国と思われてしまう

そこで使者は日本の王が女帝である事を隠そうと、「倭国の王は天をもって兄とし、日をもって弟としている。日の明ける前に政(マツリゴオ)をし、あぐらをかいて座る。日が明ける前に政をやめ、弟に委(ユダ)ねる」と訳の分からない返事をして、文帝に嘲笑された

## 隋文帝の嘲笑と日本の対応

世界第一の強大国・文明国の隋から日本ははなはだ野蛮国・未開国と思われた。この国家的恥辱を「日本書紀」に記録に残す事は出来ない

高句麗の遣隋使派遣の誘いにもあまりに用意もなく、遣隋使を派遣した事を認めたくなかつた

そこで何時か堂々と遣隋使を派遣し、それを第1回の遣隋使としようと考え、「日本書紀」への記載を省略した。しかし中国側の記録を抹消することは出来ず、この恥ずかしい話は隋書倭国伝に記録された

この嘲笑に対して、日本の朝廷はこの時の屈辱の思いを心の槌とし、この緊張した東アジアの国際関係を利用し、高句麗と百済の援助を得て、暴烈なスピードで中国並みの文化国家・律令国家の建設に努力した

## 朝鮮問題と太子の対応

太子は開皇20年の遣隋使から隋の都長安の繁栄ぶりを聴き、国内と朝鮮3国のみの外交を考慮する馬子の対外政策に疑問を持ったであろう

もはや、隋を中心に動いている、遅れてはならない

国内は未だ氏族中心の豪族の寄り合い状況である。中国を統一した隋の国家運営、組織を見習い、個人の功績を認める冠位を設け、皇室中心の官僚制度等の導入を考慮する必要がある

しかし、現実を見たとき、解決しなければならない問題が山積みである

隋の侵攻に備える高句麗の要請により、推古10(AD602)年日本は高句麗・百済との三国同盟による新羅遠征を計画して、兵2万5000を筑紫に滞留させている

朝鮮問題は伝統的に馬子に処理されていた

いままでの外征軍は紀・巨勢・穂積等の臣・連の有力豪族が参加していたが、今回の外征軍は天皇家の軍事力を増強強化しようとする

太子自身の考えで、太子の弟来目皇子に国造・伴造の軍衆で構成したものであった

摂政としての太子は国の利益を第一に考えねばならない。新羅征討は日本の益になるのか？

国と国との間でトラブルが生じ、その解決策は戦争である

2万5千の軍隊が海を渡り朝鮮半島に赴けば、例え高句麗・百済の助けを得ても敵国で戦った事のない日本の軍隊、種々の困難が襲いかかる事が予想される。また、勝利を得る事が出来ても、敵であろうと、味方であろうと、多くの人間を殺害する事になる。仏教信者の太子としては許される事ではない

そこで太子の解決案は、兵2万5000を筑紫に滞留させ、新羅を牽制して、半島への渡海を避ける道であった

推古11(AD603)年来目皇子の死去により半島出兵は中止された

## 聖徳太子 その業績

### 聖徳太子の新しい国づくり

推古11(AD603)年を境にして、政治の主役は蘇我馬子から聖徳太子に代わった

馬子の現実主義政治から、高い理想を有する政治で日本を中国並み、それ以上の文化国家を建設するための施策である

#### (1)小墾田(オハリタ)宮への遷都(推古11(AD603)年)

1代1宮制を廃止し、恒久な都を建設。これはまた蘇我馬子から距離を置き、太子の理想の国家建設の第1歩である

#### (2)朝廷儀式の整備

大楯・旗織等儀状用具を整備し、天皇の権威を確立するため天皇の尊厳ある儀式を設立した

#### (3)冠位12階の制定(推古11年12月)と17条憲法の制定(推古12年4月)

冠位12階の制定は従来貴族の手にあった政治権力を天皇の元に帰せしめる

豪族を官人化し、色の冠を授与する事により、冠位を与えるものと与えられる者の力を臣下に見せ、天皇の権力を強化する事を狙った

太子は姓(カバネ)という身分制から出来るだけ解放し、人の生まれた身分ではなく、個人の能力・功績に官位与え、広く人材を登用する事により優れた官僚機構を作る事を目指した

日本の天皇は中国の皇帝のような絶対的権力を有する専制君主ではない。天皇は象徴的存在で懲罰権は有せず、臣下に賞と恩寵を与える栄誉権のみを有する

冠位は徳(紫)・仁(青)・礼(赤)・信(黄)・義(白)・智(黒)、それに大(濃)小(淡)の色をつけ12の冠の色、飾り物で分けた

17条憲法は、日本で初めて作られた法である

普通法律と言えれば刑法を連想するが、17条憲法は、中国古典に典拠する言葉、儒教・法家の思想や仏教を取り入れ、群臣百官に対する道徳的教訓であると共に職務規定である

#### (4)法興寺の完成と丈六の仏像の建造(推古14(AD606)年)

法興寺は推古4(AD596)年に建築は完成していたが、元興寺縁起には推古14年、鞍作鳥に命じた銅・繡の丈六の仏像が完成したとあるところが丈六の仏像が法興寺の金堂の戸より高く、堂に入れる事が出来なかった

工員等は相談して、堂の戸口を壊して入れようと言ったが、鞍作鳥が壊さず堂に入れる事が出来たとの記述がある

推古14(AD606)年に法興寺の本尊の交替が行なわれたのであろう

法興寺の本尊の交替は、法興寺を蘇我氏の氏寺から国家の寺へ替え、推古と聖徳が相助け合う天皇中心の政治に一新した事を官臣に知らしめた

#### (5)太子の2経の講読(推古14年)

天皇は7月太子を招き、太子は「勝鬘(ショウマン)経」を3日に渡り講じた。また岡本宮で天皇を迎え「法華経」を説き、天皇は播磨国の水田百町を下賜された師の慧慈が来日、帰化したのが推古3年、太子が本格的に仏教を学び10年が経つ。太子はこの10年間研鑽を経て、驚くほど早く仏教を習得した

仏教の最高水準を有する慧慈の手助けを得て、2経の講読が出来る程学問は進んでいた

けれど、小野妹子が遣隋使に派遣されるのは推古15年、当時の日本には十分な仏教資料があったとは思えない

太子は仏教普及の為、難解な説明は避け、誰にも理解できるように、判り易く説明したのであろう

特に「勝鬘経」は、婦人を軽視する仏教思想に於いて、女性の価値を積極的に認める立場を取っている。推古天皇に気に入られた經典である

太子は推古天皇に代わり、勝鬘の言葉を理解し解説したのであろう

この講義に最も感激したのは推古天皇自身であった

しかし、太子はこの2経講読には不満が残り、後に三経義疏(サンキョウギシヨ)を制作したのであろう

#### (6)七寺の建設

法皇定説は太子は7つの寺「四天王寺・法隆寺・中宮寺・橘寺・蜂丘寺・池後寺・葛木寺」を建てたとある

蜂丘寺は河勝秦公が造った広隆寺、池後寺は法起寺の事、葛木寺は葛城臣が賜わった

この7寺を太子自身が建てたか疑問があるが、この7寺は太子とは関係の深い寺で大和と難波の要地に置いた

法隆寺は斑鳩から河内に出るのちの奈良街道に、葛木寺は飛鳥からの竹内街道と2街道の交通の要地に建てた

物部戦争の結果、馬子は都の近く飛鳥の地に法興寺を建てたのに対し、太子は四天王寺を日本の入口、難波の地に建てた

そして葛城・斑鳩・山城等交通の要所を太子の支配体制を固め、馬子の周囲を何時の間にか包囲したも同然であった

こうして、国内体制を整備した。

#### 公的第1回遣隋使の派遣と裴世清の来日(推古15(AD607)年)

太子は開皇20(AD600)年の遣隋使の屈辱を晴らすべく、推古15(AD607)年、小野妹子を大使とし、鞍作福利を通訳として隋に派遣した本格的な使節派遣の経験に乏しい日本は、隋の覚えがめでたい百済の使と共に赴いた

小野氏は奈良付近の豪族春日氏の一族で、琵琶湖の西岸に住み、帰化人集団と深い関係を持ち海外の事情に通じていたも相当

小野妹子は漢文も相当読み、多少漢語も話せた

鞍作福利は鞍作鳥の縁者で、当時最も中国語を話せる1人であった

隋書倭国伝に「海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞く、故に朝拝を遣わす」とある。隋の煬帝を菩薩の天子と呼び、この菩薩の天子を一目拝するため使者を送ったという

当時の煬帝(ヨウダイ)は全盛の隋の皇帝。煬帝は何世紀ぶりの大国を統一した名君であった

この言葉に煬帝の自尊心は十分に満足させられたであろう

次に太子は煬帝が海西の菩薩天子なら、自らは海東の菩薩天子に当たると記した

太子は中国を仏教と儒教の理想の国と考え、隋から仏教と儒教の理想を学び、我国を文明化すると表明したのであろう

中国へ朝貢する事は、隋に貢物を持って来て、中国に支配権を認めてもらい中国の属国になることである。倭国の王は国書の文面で、「日出ずる天子、書を日没の天子に送る」と対等に語りかけている。しかも日の昇る東は、日の沈む西より上、対等以上と聞こえる



隋がいくら大国でも国と国との付き合いは対等でなくてはならない。太子は多少背伸びして、馬鹿にされてはいけない、前回のように中国の皇帝に軽蔑されてはいけないとの思いがあったのだろう

煬帝は蛮夷の王は全く礼儀知らずめがと思っただろう

煬帝は「蛮夷の書、礼無きもの有り、また以って聞こゆるなかれ」と記している

煬帝はこの国書に大変怒ったが、日本との関係を切らず日本への使者としてに裴世清を、小野妹子と共に遣わした

隋の煬帝は高句麗を討つ為、日本の最も欲している物、文化、仏教を与え、高句麗に味方する日本を引き離し、隋に帰するとの計算の元で裴世清を日本に派遣した

小野妹子は推古16(AD608)年4月裴世清を伴い百済經由で帰国した。途中隋の煬帝から日本の王にあてた国書盗難事件があった

太子は隋の使者裴世清を最高の賓客として小墾田の都に迎えた。日本の朝臣は冠位12階の規定通りの華美の服装で歓迎した

裴世清は再度多くの留学生を伴う遣隋使の派遣を提案した

9月小野妹子は裴世清を伴ない儒教・仏教等の文化摂取のため、高向玄理、南淵請安ら8人の留学生と隋へ派遣された

### 三経義疏(サンキョウキショ)の製作(推古19~23年)

隋と高句麗との戦闘を演じた大業8(AD612)~10年までの間、日本は表面的には平和であった

太子は推古14(AD606)年の「勝鬘経」・「法華経」の2経を講読した。仏教の最高水準を有する慧慈が全面手助けしたとは言え、その内容に不満が残ったのであろう

遣隋使による中国との交流で、小野妹子に依頼した仏教の資料、僧肇(ソウジョウ)の「註維摩詰経(キッキョウ)」、法雲の「法華義記」、「勝鬘経」等の注釈書が手に入るようになった

この時、太子は中国の注釈書により、文字による思想の普及、文化の時代の到来を感じた

太子は自らの考えを周辺の人々に語ることだけでは世の中を、日本を変革する事は出来ない

文字により、より正確に人々に伝える必要を感じた。人々に「伝承の時代」から新しく「文字の時代」の到来を示すため国際的な仏教書の製作を決意した

それが「三経義疏」と呼ばれる「勝鬘経義疏(ショウマンキョウキショ)」・「維摩経義疏(ユイマキョウキショ)」・「法華義疏(ホツケキショ)」である。この三経義疏の製作については日本書紀に記載がない

### 隋の敗戦と聖徳太子

太子は、超大国の隋が高句麗に敗れるはずはない。隋の高句麗戦争に於いて隋の勝利を確信し、対岸の火事視していたであろう

大業8(AD612)年までは煬帝の人生は順調であった。優れた見識で多くの大事業を計画し、強い意志で実現した中国史上稀にみる英雄であった

大業8年を境に煬帝の人生は大きく変わった。超大国の隋が東夷の小国に敗れる屈辱を味わった

誇り高い煬帝にとって、この屈辱は何としても雪がねばならない

煬帝は臣下の止めるのも聞かず、2度・3度と高句麗遠征を試み、また遠征に失敗した。

推古23(AD615)年、隋から帰国した犬上御田鍬は太子に隋の敗北と国内の混乱を詳しく報告した

推古26(AD618)年、高句麗の使者が隋の滅亡を伝える

隋が滅亡し、煬帝が殺害された

太子にしてみれば、あの隋が一挙に滅亡するとは思ってもいなかっただろう

海西の菩薩の天子として尊敬し、それを見習おうとした煬帝が死んだ、そして憧れた国が亡んだ

隋滅亡の知らせは太子に大きな衝撃を与えた

隋の滅亡は推古15年以後の太子の外交方針が失敗した事になる。今や外交政策を大きく変更しなければならない

あの大国の隋が、あれほど文化国の隋が僅30年にして亡んだ、わが国は大丈夫か？

日本は島国であり、外国の侵略を受ける事は少ないであろうが、内に革命が起こらないであろうか？

聖徳太子はこの時不安を感じた



国家とは何か、日本とは何かを太子は嫌でも考えざるを得なかった。おそらく馬子も同様であっただろう  
推古15(AD607)年小野妹子を隋に派遣した外交方針の転換について、馬子は太子と同意見であったとは思えない  
馬子は狡猾な外交官であり、政治家である。国家とは何かを充分に知っている  
一国の指導者が、自国よりはるかに強い国家の滅亡を見て、自らの国家のあり方に何も心配しない事はない  
聖徳太子伝暦には太子がこの隋の敗北にショックを受けた時、馬子が慰めて言った「彼の国の慣わしは日本と違い、彼の国は易姓革命の国であり、日本は万世一系の国であり、東の端にあり、そういう流血の乱はない。だから仁を修め、隣に善くし、中国の修礼を待つべし」と  
隋の滅亡は太子の外交の失敗である。太子の指導に従ってきた群臣等は太子の批判を始め、太子の政治に対する不満が表れた  
推古15年の外交方針の転換に賛成できなかった馬子は、やんわりと太子の外交の失敗を非難しつつ、再び政治の主導権をその手に戻すことに力を尽しただろう

### 「天皇記」・「国記」等歴史書の作成(推古28年)

中国において歴史書の編集は国家の大きな事業である。隋を真似て律令国家造りを目指す太子は今、目の前にした隋の滅亡という事件に遭遇し、歴史書の編纂は国家事業として、まさに時代の急務となった  
太子は馬子の言うように、「中国は易姓革命の国、日本は万世一系の国」中国のように「流血の乱」は起きない事を明確にするためにも日本の歴史書の編纂の必要を痛感した  
馬子も同様の思いから大いに協力したことだろう  
推古28(AD620)年12月、「太子と馬子大臣が議して、天皇記及び国記、臣連伴造国造百八十部並びに公民等の本記を記録した」と日本書紀にある  
これは歴史編纂に関する日本最古の記録である  
これらの歴史書は太子と蘇我馬子の協議とあるが主導権はやはり太子にあった  
その歴史書は「天皇記」と「国記」と「臣連伴造国造百八十部並びに公民等の本記」とに分かれ、いずれも今は伝わっていない  
「天皇記」・「国記」、特に「天皇記」は天皇家の皇位継承の次第等国家の大事を記したものである  
しかし、その歴代の治世年数は日本紀元との問題がある  
推古10(AD602)年、百済の僧観勒(カンロク)が暦の本を奉り、その前年AD601(推古9)年は辛酉(シユウ)の年であった  
中国では干支(カンシ エト)1運60年の21倍、1260年目の辛酉の年に革命が起きるとする讖緯(シイ)思想がある  
そこで推古9年から逆算して、1260年前を神武即位の年と定め、1260年を各天皇に細かく割り付けて年表のようなものを作成し「天皇記」としたらしい  
「国記」は日本全体ではなく、もっと小さな諸国、国々の地誌を記した「風土記」のような物とする説と日本全体の歴史、建国の由来、国政の発展、大陸諸国との交渉等を記した物とする説がある  
「国記」は「天皇記」の次に置かれており、「日本の国」を対象に書かれたものではなかろうか？  
「臣連伴造国造百八十部並びに公民等の本記」は天皇の支配下にある諸氏族及び官人の全体を指し、その由来を記したもので天皇の支配に服するに至った事情確認を記したものであろう  
これは十七条憲法の第2条と関連し、国造や中央から派遣された国司による土地・人民の私有を禁じ、土地・人民を公有にし、天皇の下に真の意味の統一国家にする事である

「日本書紀」には、皇極4年のケータの時、蘇我蝦夷の館に於いて焼けるところを、船史恵尺(フネオヒトサカエ)が素早く焼かれる「国記」を取り出して、中大兄皇子に奉った」とある  
しかし、船史恵尺が持ち出した「国記」は壬申の乱の時に消失されたという

### 太子の最後

日本書紀は「推古29(AD621)年春2月5日夜半聖徳太子は斑鳩宮に薨去された」と記している

## 「まとめ」

太子は遣隋使等が持ち帰った仏教の参考書や注釈書により、仏教思想を文字により正確に人々に伝えるため、国際的な仏教書の制作を決意した「三経義疏」を作成して「新しく文字の時代」の到来を告げた  
そして、隋の滅亡・煬帝の死ほど聖徳太子に大きな衝撃を与えたものはない  
海西の菩薩の天子と尊敬し、見習おうとした煬帝の死、憧れた隋が滅亡した  
隋の滅亡は太子の外交方針の失敗を意味し、外交方針を大きく変更しなければならない  
太子は「易姓革命の中国」と違い、「万世一系の国日本」では中国のような「流血の乱」は起きない事を明確にするため、「天皇記」・「国記」等の歴史書の作成が必要と考え、馬子の協力得て、日本の歴史書を作成した  
私は「天皇家の血統」と「日本書紀に記載のない遣隋使」とその対応、「三経義疏による文字の普及」、「隋の滅亡による歴史書の作成」等、あまり知られていない聖徳太子の遺業を中心に纏めてみたものである

## 参考資料

- |   |        |         |  |
|---|--------|---------|--|
| 「日本の歴史1（神話から歴史へ）」                           | 井上光貞   | 中央公論社   |  |
| 「日本の歴史2（古代国家の成立）」                           | 直木孝次郎  | 中央公論社   |  |
| 「全現代語訳（日本書紀 上・下）」                           | 宇治谷 孟  | 講談社学術文庫 |  |
| 「聖徳太子 I～IV（仏教の勝利）（憲法17条）（東アジアの嵐の中で）（理想家の孤）」 | 梅原 猛   | 小学館     |  |
| 「隠された十字架」                                   | 梅原 猛   |         |  |
| 「聖徳太子の真実」                                   | 大山誠一 編 | 平凡社     |  |